

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

# 万葉の川心 第27回

川崎市立木月小学校教諭 船田 園子

婦負郡鷓坂河の邊にして作れる歌一首（巻第十七 四〇二三番歌）

鷓坂川渡る瀬多みこの吾が馬の

足掻の水に衣ぬれにけり

ずいぶんと煮詰まった珈琲を口にしながら、ワープロと書類の狭間でひっそりと思をしている。真夜中だというのに、仕事の山のふもとにいて、そのうえちつとも進まない。子どものように、「やらなければいけないこと」と「ちよっと休憩」を天秤にかけ、言わずもがな「休憩」をとる。ちよっと新聞を読んでから

ちよっと一眠りして たばこが切れてる、ちよっと出掛けて

ちよっと一服 珈琲を入れたら始めよう・・・永遠に続きそ

うな「ちよっと」。まるで永遠に続く夏休みの宿題のように。そんな自分を、昔はずっと許せなかった。ただただ自分を追いつめるように仕事を増やした。いつから自分に優しくなったのだろう。いつから、人を愛せるようになったのだろう。

大伴家持は、推定年齢で二十九歳から三十四歳ぐらいの間、国守として五年間越中に暮らしている。越中は、「天さがる鄙」「しなさがる越」と言われたところ、はじめは妻を伴わず、単身で赴任した。望郷の念と妻を恋う思いは強い。

もつと自分の心を表現できる手立てはないかと、花を愛でたり、中国文学を勉強したりして、歌を詠む機会をたくさん得たと考えられる。また、都から客人が来れば、都では見られない越中の名所へと案内し、自分自身も諸都を巡行してきた。どこへ行こうとも、大宮人としての気持ちは消えない。「馬で鷓坂川を渡れば、超えねばならぬ瀬が多い。馬の足掻きではぬる水に、私の衣は濡れてしまったよ。」衣が濡れるといえは、なにとはなしに涙で濡れたのではと感じてしまふ。世間にも渡る瀬は多い。波を越え、大河を渡れば苦勞も多く、望郷も妻恋も一気にあふれてくる。人はいつでも心に自分だけのふるさとをもつという。自分を待っている。そして、そのまま包んでくれる故郷をもつ人は幸いである。幸いであると同時に、とてせつない。

電話器の向こうから「お疲れさま」の音がする。やさしい言葉が心のどけを溶かしていく。



婦負郡鷓坂河の土手にて